
キミトボク

ムニプニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミトボク

【Nコード】

N5286S

【作者名】

ムニプニ

【あらすじ】

道化を演じる少年は絶望していた。灰色の化粧で滑稽に踊り続ける。たった一人の観客のために。

(前書き)

徹夜で仕上げて、県のコンクールだして、当然のごとく落ちた第二弾。

僕の世界は灰色だ。

真白な光と真黒な闇がぐるぐると混ざった、淀んだ灰色になっている。

「貴方は壊れているんだね」

君は笑いながら言う。

「道化師みたいな仮面をつけて、道化師の振りをしてる」

まったくもってその通りだ。

「バツカみたい」

ああ、お願いだから笑ってくれ。

滑稽な夢の中、僕はグルグルと淀んでいる。

「ねえ、死んでよ」

そう、君は笑った。朝一番の挨拶がこれ。慣れてしまったのか、もうなんとも思わない。まあ、最初からなんとも思ってたのかもしれない。

「また今度ね」

適当にあしらうと、蹴られた。無視。僕は君を抱き起こす。

「ほら、暴れると服が脱がせないから」

「ん」

君が顎を引いたのを確認して、シャツを脱がせる。

「寒い！」

唐突に、腹に頭突きをくらい息が詰まった。まあ、この程度慣れているので問題ないけど。首根っこを掴んで、僕は君を引き剥がす。本当なら非力な僕にこんなことはできないけど、君は異様に軽い。それもそうだろう。腕二本分の重量がないんだから。滑らかな白い肌が唐突に終わり、ひび割れの様な歪な凹凸がある。断面はもはやモザイクだ。白と赤とピンクと紫、まるで拷問でも受けたかの様な

傷痕。ブチブチとミチミチと擦じ切られた両腕。神様もブラックジヤックも誰も君の腕を治してはくれなかった。済んだこと仕方ない。どうせ、不便なのは僕じゃないし。嘘。世話をするのはかなりの負担だ。腕がない君は日常生活すらままならない。食事から着替え、果てには風呂なども。それも本人はとびつきり我が儘なお姫様、肉体的にも精神的にも疲れる。まあ、色々人として枯れている僕には関係のない話だが。

閑話休題。

着替えを終わらせると、用意してあった千切ったパンを君に食べせた。僕は白いご飯の方が好きだけど、朝は忙しいから食べさせる側も食べさせられる側も手軽なものが好ましいからそこはグツと堪える。それからしばらくして、君が僕へ笑いかける。ちなみに今日の服装は黒のワンピース。

「ねえ、死んでよ」

「嫌だ」

また僕は即答した。

「ま、死ぬこと自体は拒まないけど」

「なら、どうして？」

「苦しいのが嫌だからさ。一撃で死ぬか、眠るように死ぬるなら考えるよ」

「我が儘言わないでよ」

「そっくりそのまま君に返すよ」

君は唇を尖らせる。

「ケチ」

「ケチで結構」

「ううー！」

子供が駄々をこねるように、バタバタと足をバタつかせた。何回か、足を蹴られる。痛い。

「ねえ、きつとあっちは良い所だよ」

あっち？ それって死後の世界？

「だって、今まで誰も帰って来ないんだよ？　よっぽどお気に入ったんだよ。だから、こんな世界にいるよりも、あっちの方が楽しいよ？」

君は一度言葉を切り、微笑んだ。

「だからね、一緒に死のう？」

蕩けそうなくらい華やかに笑われても、内容が内容だ。僕は深い溜息を吐く。

「貴方もよく言ってるじゃない。こんな世界嫌だって」

「ちよっと違う。この世界が僕を嫌いなんだ」

ついでに言うのと、僕はこの世界を嫌ってはいないが、絶望はしている。

「じゃあ、比較してよ」

「何と何を？」

「この世界とあっちを」

「生憎と、僕はあっちについてほとんど情報を持たないんだえけど？」

「そんなの想像で補ってよ。いまじねえーしょんだよ」

「想像、ねえ」

なぜだろう？　死後の世界なんて地獄しか出てこない。根がネガティブだからだろうか？　まあ、嘔吐きだし。仕方ないだろう。

「どう？」

「どう、もなにも……普通に地獄しか思いつかないけど？」

「どうして!？」

そうなに驚かれても……本当のことだし。仕方ないじゃないか。そう口に出す間もなく、腕に痛みが走った。気がつけば君が噛みついている。本当に油断も隙もありはしない。それとも僕が鈍いのか？

「……痛いんだけど？」

「……………」

「離してくれない？」

「ふや」

舌がチロチロと肌を撫でてくすぐったい。まあ、歯がグリグリと肌を破いているのだけだ。

「どうして？」

「ふうあって、ひふらるひふぬられもん」

喋るたびに腕を舐められるせいか、集中できず八割聞き取れない。嘘。だいたい言いたいことは解っている。本当の事を言っているだけなのに、僕もかなり理不尽な思いをしている。

グイ、と君の頭を押し戻すと肉が一緒にめくれる嫌な感じがした。幸い、君が直ぐに歯を抜いてくれたおかげで軽傷ですんだけど。僕は手早く傷の手を手当てを済ませ、君のご機嫌取りへ戻った。

「まあ、あっちは素晴らしいところだろうね」

僕にとってこの世界は地獄未満だ。

「……………ホント？」

「うん。本当本当」

「じゃあ、死んで！」

「ゴメン、無理かな」

「なんで!？」

「度胸がないから」

彼女の顔が歪むのを見て、少し胸が苦しくなった。それでもやっぱり、知らないところへいくのとか怖いし。僕は臆病者だし。キヤーコワイー。ま、嘘。なんとなく死ぬチャンスを逃したまま、ズルズルと生きてきた結果が現状だ。

僕はあまりこの世界に優しくしてもらったことがない。というか、最初から期待すらしていない。それを絶望と称するなら、僕は最初から最後まで絶望している。あー、カッコウをつけても凄く自分が嫌になる。それでも世界は僕を殺しちゃくれやしない。君の両親や、僕の両親のときみたいに終わらせてなんてくれない。それこそ、この世界に何も望まなくなるほかに。

「本当……死ねるものなら死にたいよ」
できはしないのだけだ。

ほんの少しだけ空気を震わせたそれは、溜息にも似た僕の――嘘吐きとしての本音。無意識で、そして無感情な呟きは空気と混ざり合い、まるで水にナトリウムで放りこむように、世界は劇的な反応を見せた。

「じゃあ、私が殺してあげる！」

ドン、と真正面から君に飛びつかれる。君の矮躯は真綿の様に軽かったが、勢いはあり僕は押し倒される。背中を強かに打ちつけて痛かった。数秒遅れて、更に鋭い痛みを右の首筋に感じる。君が首筋に噛みついていていた。正確には鎖骨の上あたり。痛い。血も出てる。皮膚を破り、ミチミチと歯が肉に食い込み、毛細血管をズタズタにした。なんか大事なもので噛み切れそう。実際、管の様なものをブニブニと歯で押されている。歯が食い込んだらたぶん死ぬだろう。

「ふあつふてねえー。ふぐひふくひひてふあげふ」

熱いくらいの舌がベツタリと皮膚に、生温かい唾液を塗り付けた。何か言われているようだが、九割聞き取れない。意味が解らない。嘘。意味なんて言われなくても解ってる。どうやら僕は君に殺されるらしい。それもいいかもしれない。どうせ、死にたくても自分じゃ無理なんだし。それにしても死ぬって、意外と簡単じゃないか。ウダウダ言い訳しなくても死ぬるじゃないか。なんだ、なんだ。今までの人生は無駄だったのか？ それは虚しいものだ。急激に体が冷めていく。血管に血液じゃなくて食塩水を流し込んだようだ。ああ、耐えきれない。とつとつこのくだらない悲喜劇を終わらせてくれ。

「なんだ、生きていたいんじゃない」

君は僕から歯を引き抜きながら言った。僕はそれがどういう意味なのかまったく理解できない。

「貴方のココはまだまだ生きたがってるよ？」

そう言って僕の胸をポンポンと叩いてくる。その意図が解らなかった。数秒遅れて、セッセツと働いている心臓の事だと気付く。

こんな傷を負っても、こんな風に考えても僕の体は滑稽に足掻いていた。

「そうなのか……」

僕はひょっとして生きていたかったのか？ 死にたいとか言いつつ、屁理屈こねてたのはそういうことなのか？

「ああ、そうだった……すっかり忘れていた」

僕は嘔吐き。僕は道化師。

自分を騙すのだってお手の物だ。

心理学的に言えば『防衛機制』。より正確には『反動形成』。抑圧した思いを隠すために、その思いと正反対の行動をとること。僕は生きるために死ぬほど足掻いていた。それと同時に生きることに疲れていた。生きたいからと足掻けば足掻く程に、僕の心は擦り切れ、疲弊する。二律背反。その内、僕は嘘を吐く。生きている意味なんてない。自分で死ぬ勇気もないから、とりあえず生きているだけだ。そして、僕は生きることをやめた。ただ死んでいないだけの傀儡として、停滞し硬直した。一度そうなってしまうと、記憶を偽るのなんて簡単だ。だって、僕は嘔吐きだから。

「ねえ、どうする？」

君はニヤニヤと笑う。ペロリ、と口についた血を嫣然と赤い舌で舐めとった。

「貴方の仮面は剥がれたよ？」

仮面。僕が演じてきた？ 死にたがり？。でも、剥がれた仮面はもう、僕の顔にはならない。なら、今度は化粧でもしてみよう。その方が道化師らしい。

「ごめん。僕はまだ死にたくないみたいだ」

ちゃんと笑えてるんだろうか？ この化粧は僕の顔になりえるだろうか？

「あーあ、あっちはきつと楽しいのに」

君は拗ねたように唇を尖らせる。

「……どうして僕を巻きこむんだよ？」

僕の呟きに、君はきょとんとした表情で、小首を傾げた。

「貴方がいない世界なんてつまらないよ？」

そんな気恥かしいことをさも当然といった風に言われても困る。

「貴方がいないならどんなことも楽しくないよ？」

「そうか……ならもう少し生きてみよう」

「えー」

不満の声があがるが無視した。たまには君を困らせたい。

僕にはやりたいことができた。今回ばかりは嘘でも虚言でも戯言でも妄言でもない。嘘吐きの嘘みたいな本音。

「死ぬなんていつでもできるんだからさ。飽きるほど思いっきり生きてみようか」

「うー……そこまで言うなら、仕方ないね」

「もし生きるのが嫌になったら、あっちでのんびり暮らせばいいさ」

「ホント？ やったー！」

あの世の存在なんて信じてないけどね。君が喜ぶんなら、こんな嘘の使い方も悪くない。

ま、嘘なんだけど。

僕の世界は灰色だ。

善も悪もないグレーゾーン。

クルクルと廻る、矮小な世界。

淀んだ羊水の中をプカプカと浮かぶ気分。

そんな生温かい箱舟の中で、僕は道化師として踊り続ける。観客はたった一人いれば十二分。君が笑っていてくれうるのなら、僕はいくらでも滑稽に夢を見続けよう。

(後書き)

感想、批評、誤植報告よろしく願いします。

これも前回同様書ききった！！ て感じもないし、構想より大幅にずれてる。

だからこそ、感想をください。

どんなふうに見えてるか教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286s/>

キミトボク

2011年4月17日09時10分発行